

# 出会い、ふれあい、心の輪



〈完全参加と平等〉

令和5年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文  
障害者週間のポスター

令和5年11月

富 山 県

## 目次

# 心こころの輪りんを広ひろげる体験たいけん作文ぶん入賞いしょう作品

### 最優秀賞

#### 中学生の部

手話で広がる私の世界

富山市立速星中学校 二年

川崎楓愛  
…………… 1

#### 高校生の部

自分の声で

富山県立南砺福野高等学校 一年

吉田翠  
…………… 3

#### 一般の部

闘い

牧田恵実  
…………… 5

## 優秀賞

### 中学生の部

「ありがとう」の気持ち

高岡市立高岡西部中学校 一年

障害のある人と私

射水市立小杉中学校 二年

堀山 室陽 川 佳 音  
せいのん  
………  
10 8

### 高校生の部

忘れられないこと

富山県立南砺福野高等学校 二年

大会に出場して学んだこと

富山県立南砺福野高等学校 三年

岡田 彩 鈴  
とみ た  
あかり  
………  
14 12

## 障害者週間のポスター入賞作品

### 最優秀賞

#### 小学生の部

みんなのでいっしよにえがおのまち

富山大学教育学部附属小学校 二年

米田佳純  
よね だ か すみ  
………  
16

## 中学生の部

共存

射水市立小杉南中学校 二年

長谷川 奈南  
はせがわ なな

## 優秀賞

### 中学生の部

ヘルプマークを知っていますか？

黒部市立明峰中学校 一年

廣世藍蒔  
ひろせ あいじ

ゴールまで……。

射水市立小杉中学校 三年

八嶋明日香  
やしま あすか

…………… 17

## 参考資料

令和五年度 「心の輪を広げる体験作文」 及び 「障害者週間のポスター」 募集実施要領 …………… 18

令和五年度 「心の輪を広げる体験作文」 及び 「障害者週間のポスター」 応募状況 …………… 22

令和五年度 「心の輪を広げる体験作文」 及び 「障害者週間のポスター」 審査会審査員名簿 …………… 23

本作品集に掲載する作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

# 「手話で広がる私の世界」

富山市立速星中学校 二年

かわ さき ふう あ  
川 崎 楓 愛

「ねえねえ、あっちゃん。今度私の誕生日なんだけど。私の誕生日、一月十二日。」

「はいはい、わかったよ。」

耳の聞こえないあっちゃんと、手話で会話をする。拙い私の手話を、あっちゃんは一生懸命読み取ってくれる。私もあっちゃんと話がしたく、覚えた手話を使ってあっちゃんに話しかける。手話サークルでのやりとりだ。

小学校二年生のとき、学校の音楽会で、手話を使って歌を歌った。その時に初めて手話の存在を知り、手を使って話ができるなんて凄い、と思い、手話に興味を持った。もっと勉強したいと思ったので、手話サークルに行った。

「私の名前は川崎楓愛です。」最初に教えてもらった手話だ。私は、へええ、名前ってこうやってやるんだ！と驚いた。早速あっちゃんに使ってみた。すると、あっちゃんがなにかや

っている。通じたのかな？「あっちゃんは、よろしくお願ひしますとやっているんだよ。」とサークルの人が教えてくれた。やったあ、通じた。その時の嬉しさは今でも覚えている。それからサークルに通うごとに、色々な手話を覚えていった。

小学校五年生のとき、もっと勉強したいと思い、手話講座を受講した。そこでは、手話だけでなく、聴覚障害者について学び、最も大事なことは表情だということも教わった。

六年生のときには、手話の世界で感じたことをテーマに手話を使ってスピーチをした。多くのろう者の方に伝わったように、大きな拍手を頂いて、嬉しかった。これが自信に繋がって、手話検定試験にもチャレンジしている。

サークルに通う色々な人と話ができるようになった。他愛のない日常の話から、ゴールデンウィークや夏休みに旅行に行った話など、多岐に渡って話をしている。ろう者の方の話

を一生懸命読み取り、向こうも私の話を真剣に読み取ってくれているようで、質問されたり、嬉しい内容のときには一緒に喜んでくれたり、残念な内容のときには励ましてくれたりしている。

毎年冬には、手話コーラスに参加し、障害がある方と一緒に手話で歌を歌い、多くの方に手話を知っていただき、興味を持ってもらえるような普及活動を行っている。手話のイベントのときには、観客にお手本を見せつつ呼びかけて、会場一体となつて手話コーラスを行っている。観客のみなさんは最初はぎこちないが、老若男女みなさん笑顔で手話を一緒にやってくれる。手話を覚えるのは大変だけれど、充実感でいっぱいだ。

「はい、誕生日プレゼント。」

誕生日の日に、あつちゃんには私にプレゼントをくれた。プレゼントをくれたことも嬉しかったが、私の手話が通じていたことが何よりも嬉しかった。

私は、耳が聞こえなくても、手話を使えば会話ができることを知った。耳が聞こえなくても、手話を使えば歌を歌えることを知った。障害がある人、ない人関係なく、コミュニケーションがとれ、互いを尊重しあえることを知った。

最近、テレビで手話による通訳をよく見かけるようになった。

た。店や、ホテルなどで筆談で対応できることを表す筆談マークも普及してきた。手話はれっきとした言語だ。しかし、手話を言語として身近に感じている人はまだまだ少ないのではないだろうか。

手話の魅力をもっと伝えるために、手話をもっと広まっていくように、そして互いをもっと支え合えるように、今後も、ろう者の方と共に活動が続けていきたい。

富山県立南砺福野高等学校 一年

## 「自分の声で」

よし だ みどり  
吉 田 翠

自分だけではなく周りも変わることの意味がある。

小学2年生のときに、私は障害のある友達Aちゃんとお会いしました。Aちゃんは、障害をもっていたので、私たちの教室ではなく特別学級で過ごしていました。私は、時間が空いたときにAちゃんのいる特別学級に足を運び、会話やカルタなどで遊んでいました。

私は障害をもっているAちゃんと話したりすることは、障害をもっていない友達と同じように接することができるほど楽しいことでした。

ある日、「よく変な人と話せるね」と周りから言われました。私は、この言葉を聞いたときにとっても悲しくなったことは、今でも覚えています。私は、自分だけが障害のある人を受け入れても意味がないと気付きました。

そこで、周りの人たちも障害のある人を受け入れてもらう

ことが大切だと考えました。

私は、クラスメイトにも障害がある人も受け入れてもらうためになにをするか考えました。先生と相談してカードゲームや体を使ってできる遊びをすることにしました。私は、休み時間を使ってAちゃんと交流する機会を作りました。

クラスで「Aちゃんと交流する機会があるからぜひ参加してほしい。」と、お知らせをしました。想像どおりクラスメイトの反応は薄かったので誰も来ないと思っていました。しかし、時間になるとクラスメイト全員が特別学級にきて交流会に参加してくれました。クラスメイトのみんなもAちゃんと話したりゲームをしたりとても楽しそうでした。

今回のAちゃんとの交流する機会はただ楽しんでもらうことが目的ではありません。参加したクラスメイト全員が障害のある人に対しても差別をしない・見た目で決めつけないと

いうことを理解してもらうことが目的でした。

クラスメイトが「障害」に対しての考えが交流会の前と後で変化があったのかを確かめるためにアンケート用紙を作りました。質問内容は「過去に障害のある人に偏見をもっていいことはあるか」・「交流したことで障害のある人に対して考えたこと」この2つの質問をしました。

アンケートの結果、過去に障害のある人に偏見をもっていたことがあったと答えた人がほとんどでした。しかし、交流したことで障害のある人との関わり方について考え直していないといけないと感じたと答えた人。障害のある人もない人も関係なく差別しない・自分や周りの思い込みが全て正しいと思わない。という意見が多く書かれていました。

私は、このアンケートの結果をみて自分だけでなくクラスメイトも少しずつ「障害」に対しての考えかたが変化していると実感しました。

交流会をした次の日から、私のクラスメイト自身で、Aちゃんがいる特別学級に行き一緒に遊んだりしていました。また、障害のある人達との関わり方について真剣に考えることが多くなりました。「障害」という言葉だけで「あの人は普通ではない」。決めつけることはしてはいけないということは今後の生活でも必要になってくると思いました。

私が小学生のときに体験したことから今、改めて考えたことがあります。それは、障害のない自分たちが普通ということとは間違っているということ。一人ひとり顔や性格が違っていることは当たり前です。なので、人間に対する基準や普通は存在しないと思います。自分と違う顔や性格をしているから「仲良くなりたい」と感じてコミュニケーションをとっているのではないのでしょうか。自分とは違う良さを受け入れてお互いに尊重できる関係になっていくと思います。障害のある人も一人ひとりの良さがあります。だから私たちは、障害のある人たちの良さを見つけていくことが大切だと思います。障害のある人たちの良さを将来、仕事に生かせるような環境を作っていく必要があります。そのために、障害のない人たちで行動するべきだと考えます。

障害のある人達とお互いに支えあって生きることが当たり前な環境にしていくことが今、私たちに求められているのではないのでしょうか。



# 「闘い」

まき た め ぐ み  
牧 田 恵 実

私は精神障害者である。しかし障害者だからと言って恥ずかしさを感じることはない。なぜか？必死に闘っているからである、病気と。

病気の症状がでたのはいきなりだった。通学電車から降りると私がどこにいるのか、どうしたら学校に行けるのかわからなくなり、すぐに家族に「助けて！」と電話した。父が迎えに来てくれてパニックで動けなくなっている私の手を引いて家まで連れて帰ってくれた。その後もいつの間にか学校を出たものの自分がどこにいるのかわからなくなり泣いている私を当時担任だった先生が迎えに来てくださったこともある。そのようなことが度々起きたため学校の先生方も心配してくださり大きな病院での検査を勧められた。検査を受けに行くのと、すぐに入院を勧められ入院することになった。そして検査の結果はおそらく統合失調症ではないかとのことだった。

「統合失調症」それは百人に一人はかかると言われる病。この日から私と病気との闘いが始まった。私の症状は様々で、いきなり男の人の声で「死んでしまえ！」と幻聴が聞こえてきたと思えば次は味覚と嗅覚がおかしくなり更に妄想も加わり「食べ物の中に毒が入っている！」と必死に看護師さんに「食べたらだめだ！」と訴え、その後しばらくは食事をとることができなくなり、点滴のみの生活となった。また、入院中にいつもは病室で寝ているはずなのに朝起きたら保護室にいて、「なんで私この部屋にいるのですか？」と看護師さんに聞くと、「本当に覚えていない？昨日の夜中にいきなり暴れ始めたのよ」と言われとても驚いた。そんな目に見えず記憶もない病気と闘ってきた。とはいえこれは私一人の闘いではなかった。私には家族がいた。私を元氣付けようと焼き肉屋へ連れて行ってくれた。私を笑顔にしようと旅行に連れて行っ

てくれた。そんな家族と過ごすうちに体調も安定し始め、家族以外の人と話す余裕が出てきた。そんな時、母から一つ提案された。「障害者手帳持つてみない？」というものだった。提案されて気づいた。私は障害者なのだ。私は障害者。だから今まであんなに辛い思いをしてきたのだ。そう考えると合点がいった。だから障害者手帳を持つことを決めた。手帳を持つことで自分自身の中でまだくすぶっている「障害者」である自分ときちんと向き合い認めることができると思ったからだ。

デイケアという心のリハビリ施設にも通い始めた。そこには様々な心の病気を持つ人がたくさんおられた。そしてそこでは世間話だけでなく「今こんな症状が出て困っているのです」と家族以外の方も病気で困っていることに対しお互い遠慮なく助けを求めることができた。自分の中でそのような助けを求められるようになったのも小さな前進だと思っている。

以前友人に「精神科」に通っていると言うと「お前廃人になったんだな」と言われた。悔しかった。私は必死に病氣と闘っているのに、そんな私を「廃人」という一言でまるでダメな人間。一人では何もできない人間だとレッテルを貼られたように感じた。それからは一生懸命病氣と闘ってはいるも

のの周りには病氣になったことは隠すようになった。そしてこれ以上私を傷つけないと母は私の交友関係について、とても慎重になり、同級生などと会うのも止められるようになった。そんな中一人だけ「家に呼んだら？」と母が勧めてくれた友人がいた。彼女を障害者になってから初めて家に呼んだことは覚えている。だが何を話したのかは定かではない。しかし彼女の言ったたった一言。「めぐ、すごく頑張ってるね。」この一言に涙が止まらなかった。「大丈夫？」「辛そうだね」よりも何十倍も救われた。その友人とは今でも時々会って話をしたり、毎年桜の季節はお花見へ行ったりしている。「廃人だな」そして「頑張ってるね」どれもたった一言。その一言が人の心をこんなにも大きく動かすのだ。

私は今一人暮らしをしている。と言っても望んで一人暮らしを始めたのではない。父と母が癌で亡くなってしまったからだ。八年前父は家族やヘルパーさん、訪問看護師さんと力を合わせて家で闘病生活を送り家で息を引き取った。そして三年前母はコロナウイルスが流行りだしたころに何か月も入院し、コロナウイルス対策で面会も制限され、会いたくても会えない時期があった。母は癌が進行し、先が長くないとわかってから障害を持っていて一人では生きて行けないだろうという私とどう心中しようか本気で考えたそうだ。でも、母

が入院している間に毎日一つずつ家事を覚えていく私を知って「めぐがここまでできる子になったとは知らなかったわ。少し安心。」と心中の話は流れたそう。でもやはり母の中で心配は消えなかったらしく入院中に書いたのだろう。母は涙が止まらない程元気が出ることを書いた素敵なメモを残していつてくれた。その中の一つ、私の心を奮い立たせる一言が書いてあった。

「めぐ、ひとりだけど、ひとりぼっちじゃないから！」

その通りだ。毎日一人暮らしは寂しいと言っていた私には大好きな姉がいる。私には笑顔がかわいい友人がいる。私にはいろんな相談にのってくださるデイケアの皆さんがいる。他にも主治医の先生やカウンセラーの先生など。こんなにも多くの人に支えられながら今私は障害と闘っている。こんなにも心強くうれしいことがあるのか。だから負けない。逃げない。正々堂々と病気とそして障害者として自分自身と向き合おう。支えてくださる人たちに恥じぬよう。

そして最後にこれだけは忘れないでほしい。障害者がなんだ。健常者がなんだ。みんな闘いながら生きているのだ。仕事や病気、けが。そして人生とともに。

# 「ありがとう」の気持ち

高岡市立高岡西部中学校 一年

やま むろ よう せい  
山 室 陽 生

僕は小学六年生の九月、友達とグラウンドを走っていて突然倒れました。目を覚ました時、病院のベッドの上で体が動かず何が起こったのか分かりませんでした。病院の先生から肥大型心筋症という病気だと教えてもらいました。そのため、体に除細動器を入れることになり、僕は障害のある人になってしまいました。

検査や手術のために大病院に入院することになりました。以前は、学校に行くのが面倒くさいなと思っていましたが、早く学校行って友達に会いたいなと思うようになりました。そんな時、クラスみんなから手紙が届きました。その手紙にははげましの言葉がたくさん書いてありました。入院生活はつらいことですが、僕はがんばろうと思いました。

とうとう手術日が決まりました。手術の説明を聞いて僕は、怖くなり手術を受けたくないと思いました。手術の日が近づ

くにつれて恐怖心がどんどん強くなりました。そして、手術当日の朝になりドキドキしていると、クラスみんなから待ってるよ、がんばれなどのメッセージのついた千羽づるが届きました。それを見て僕は、胸があつくなくてがんばろうと思いました。手術は無事に終わり、僕はこの機械と友達になろうと決心しました。

退院してまた小学校に行けるようになりました。友達が多んな反応をするのか、僕のことを忘れていないかとドキドキしていました。僕が来ることを知らなかった友達は僕の姿を見ると、

「あつ、陽生大丈夫」

と、驚きながらみんな近寄ってきてくれました。その瞬間、僕の不安はどこかに行って嬉しさでいっぱいになりました。その日からクラスの友達は今まで通り普通に接してくれまし

た。

六年生最後のお楽しみ会では、運動ができない僕のことを思って、部屋の中でできることを考えてくれました。僕もクラスの一員なんだと感じることができ、思い出に残る会になりました。

中学生になり、新しい生活が始まりました。三つの小学校が合わさるので、みんな僕のことをどう思うかなと心配でしたが、普通に接してくれて安心しました。また、毎日重いカバンを教室まで先生が運んでくださるおかげでみんなと同じ教室で授業を受けています。

校外学習に向けて、話し合いが始まりました。みんなに迷惑をかけるかなという考えてしまい、自分の意見が言えませんでした。しかし、当日は、班の友達が僕のカバンを持ってくれたり、僕のペースに合わせて歩いてくれたりしてくれました。僕はみんなに迷惑をかけると思いましたが、みんなはそんなことを思っていないと分かり、とても楽しい校外学習になりました。

僕は、これらの経験からたくさんの人に支えられていることが分かり、人のあたたかさを感じられました。また、友達や先生を信じて自分の思ったことを話してもいいと思えました。自分がんばれることを見つけて、取り組んでいき、困

ったことがあったら、声に出して言うことも大事だと思いましたが。その時は、ありがとうの気持ちを忘れないようにしていきたいです。

## 「障害のある人と私」

射水市立小杉中学校 二年

堀川佳音  
ほりかわかおん

私の両親は障害のある人と関わる仕事に就いている。自分は小さいころ父の働いている「富山型デイサービス」といった誰もが住み慣れた地域の事業所等で、障害児および障害者の方がデイサービスを受けることができる事業に行ったことがある。

このときの自分は、父が働いているいろいろな障害をもっている方々がいる環境になれておらず、障害のある人に、偏見をもっている自分がいた。そして、父の仕事場に行つてなれはじめたとき、デイサービスを受けている利用者さんに髪を強く引っぱられたことがありその出来事をきっかけに障害者に対して怖く思ってしまった、父の仕事場に行くのに気が引けるようになった。

それからは、学校などもあり両親の仕事についていくこともなくなり、障害のある人との関わりがほとんどなくなった。

父親が就いていた仕事をやめ、放課後等デイサービスの管理者に就いたとき、元々働いていた富山型サービスにいた、利用者となまたま会った。その利用者さんは、そのときでも父親のことを覚えていて、父の方にかけていき、仲良く楽しそうに、しゃべっていた。その利用者さんが父に対して、とっても笑顔で、昨日今日あったことを話してそれをしているだけでも自分の心が和んだ。父は必ずしも言ってもいほど障害のある利用者さんと会話するときは、見たこともない笑顔で父親自身が子どものようににはしゃいで関わっていた。すると利用者さんもうれしそうに、父としゃべる。そんな父の姿を見て、とてもかっこよく自分も障害のある人との間に線を引かず、父のようにすてきな姿でいたいと思った。

最近自分は母が働く障害者の就職支援を行うカフェに行つた。そこでは、カフェの店員が障害のある人で、注文などの

接客や、料理おかしを作ることも障害のある人が行っている。そのカフェは障害のない人が障害のある人の手助けをしながら働いている。

カフェで働く障害のある利用者さんたちはほかの店とかわらない接客で、とても自然に感じた。自分が母の働く仕事で一番びっくりしたことは、障害者のある人となない人の壁がないことだ。自分は小さいころ障害のある人への理解がなく、自分と障害のある人との間に心なく壁をつくっていた。母や障害者のある人を支援する方々は、障害があつたとしても壁なく接し、一人一人のもつ障害、特徴を見て理解し利用者がよりよく気持ちよくすごせるように関わっていた。そのような関わることで障害のある人、ない人どちらもが不快もなく自然な雰囲気がつくられていると思つた。カフェの利用者の人と話して、全然壁なくうちとけられ、カフェの店員の一人になれた気がした。

両親の仕事場に行き、障害のある人、ない人のさまざまな面の関わり方や、両親が障害者と接する姿を見て、自分なりに、理解し障害について考えるきっかけになった。一人一人それぞれ違いがあつてそれを自分たちが受けとめることが大切だと思つた。障害のある人もない人も気持ちよく、楽しく過ごせることが一番大事なことで、そんな社会をつくつてい

くことが必要だと思つた。そのために、障害のある人を、「障害のある人」と線を引かずに、その人その人に合う接し方を見つけてさまざまな支援や広がりをつなげることや、理解を深めることが大事だと思つた。

# 「忘れられない」と」

富山県立南砺福野高等学校 二年

とみ た  
富 田  
灯 かり

私は高校で福祉の学科に入学し、福祉のことを勉強していきます。デイサービスの実習やグループホームの実習に行きました。そして一年生の終わり頃、実際に障害者施設に行つて実習させてもらい、障害を持つている方と関わることがありました。実習に行く前は、「怖い」や「コミュニケーションをとることが難しそう」という少し悪い印象を持っていました。しかし、実際はそんなことはなく、私たちと同じで普通に声を出して会話できる方もおられました。声は出せないけど、理解することができたり、指で壁に文字を書いて伝え合ったり、紙にイラストや文字を書いて会話できる方がおられ、全然怖くないしコミュニケーションをとることがとても楽しいと感じました。その実習で印象に残っている利用者の方が一人います。その方は言葉を少し出せるけど、はっきり話すことがあまりできず、お互いゆっくり伝え合いながらコミュニケーション

ケーションをとりました。なぜその利用者の方が印象に残っているのかというと、その利用者の方から多くのことを学ばせていただいたからです。食事介助の見学をしているときに、利用者の方は機嫌が悪かったのか大声を出しているところを見ました。職員の方が利用者の方を落ち着かせようとしてもなにかあったのか落ち着きがなく大声をあげていました。利用者の方は私たちと同じで、いつも機嫌がいいというわけではないし、しっかり感情を持っていて、なにか気に食わないことがあったり、ちよつとのストレスもあつたりするかもしれません。利用者の方が大きな声を出したときに職員の方は「うるさい」や「静かにして」というのではなく、利用者の方の肩をぽんぽんしたり、撫でたりしておちつかせたりして、言葉だけではなく非言語的コミュニケーションを活用して落ち着かせていて、言葉でできないことは体を使うことができ



るということを学びました。それは利用者の方が大声を出したことよって学べたことでした。実習最終日に、職員の方から「利用者の方が実習生の子に伝えたいことがあるからあとで来てほしいと言っていたよ」と伝えられました。そして私はやるべきことをすべて終えてから利用者の方のところへ行きました。すると、利用者の方は、必死になにか伝えようとしてくれていました。なにを伝えようとしているのか理解するために耳を傾けると利用者の方は、「昨日はお昼の食事の時に大声を出してごめんなさい。」と言いました。その時は突然な謝りに戸惑い、「全然大丈夫ですよ。」と笑顔で返しました。障害をもつていても、伝えたいことは伝えることができ、私たちに迷惑かけてしまったと思つて謝つてくれたのだと思います。そのあとに、「きみたちはまだ長い未来がある。夢は無限大にあるよ。将来はなににでもなれるから夢をもつてがんばって。」と言つておられ、私はその時自分の心が動いたように感じました。利用者の方の言葉を受け、私は何事にも全力で取り組み、将来に向けて頑張つていきたいと思ひました。なぜあの利用者の方が将来の話をしたのか疑問に思ひました。利用者の方との会話が終わると職員の方に「あの利用者の方は元々学校の先生だったけど、交通事故で障害をもつてしまつてこの施設で生活をしているのだよ。」と教えていた

できました。そこで私は、交通事故という一瞬の出来事で普段できていたことができなくなったり、いつものように生徒に勉強を教えていたことができなくなったりしてしまうのかと、とても悲しい気持ちになりました。私も今できていることが急にできなくなるかもしれない、いつなが起こるかかわらないと考えると、朝起きて学校に行つて仲間と勉強していること、生きていること、自分でなんでもできることが幸せだと気付くことができました。利用者の方は、誰かに何かを教えたいという心は変わっていないのだと思ひました。教えていただいたことを忘れず、夢を持つて夢に向かつて努力していきたいと思ひました。私は言葉で関われたし、心でも関わることでできたと思ひました。これからの長い人生、いろんな方とふれあい、たくさんを知つていきたいと思ひました。

# 「大会に出場して学んだ」と

富山県立南砺福野高等学校 三年

おか だ いろり  
岡田彩鈴

私は先日、高校生介護技術コンテストと言う大会に出場しました。その大会は、福祉を学ぶ高校生が介護技術を競い合うことにより、高校生の介護技術を高めるとともに、様々な介護場面において、適切かつ安全に支援できる能力を育成するために行われています。

大会前に利用者さんについての情報が届きました。今回の利用者さんは、緑内障により3か月前に全盲になったという設定でした。夏休みに入ってから、出場するメンバーや福祉科の先生方と共に支援方針について考えました。移動の支援ならこうしよう…食事の支援ならこうしよう…と、利用者さんによりよい支援を行えるように意見を出し合い、実際に身体を使って練習し、大まかな支援方針を決定しました。支援方針を決定していく中で、特別養護老人ホームでの介護実習で出会った全盲の利用者さんのことを思い出しました。

その方は、目が見えなくなったことに対して恐怖心を抱いておられ、信頼関係を築くのにとっても苦労しました。視覚障害をお持ちの方は「目で見て確認する」ことができません。五感の中でも図抜けて主張が強いと言われている「視覚」から入る情報を、他の五感で補うような支援が支援者には求められます。全盲の利用者さんと関わらせていただくときは、丁寧な説明や肌で感じていただくことを心掛けていました。その甲斐もあって、実習後半には、少しでも信頼関係を築くことができました。

介護技術コンテストでの演技時間はたったの7分です。その7分間で、利用者さんとの信頼関係を築き、適切かつ安全な支援を行うことが求められます。実習では、何日も何時間も掛けて信頼関係を築きました。それを7分間で築くためにはどうすれば良いのか、とても悩みました。丁寧すぎる声掛

けや説明を行ってはいはスムーズな支援を行うことができず、時間オーバーになってしまいます。かと言って声掛けや説明が少なすぎると、信頼関係を築くことができません。適度な丁寧さを持つて関わることを意識して練習を重ね、当日を迎えました。演技を披露する前に事例が渡され、事例検討をする時間が25分間設けられました。事前に考えておいた支援方針を組み合わせ、声掛けや説明の内容を確認し、より良い支援が行えるように最大限備え、無事演技を披露することができました。事例文で求められていたタスクを全て完了することはできませんでしたが、悔い無く演技を行うことができました。コンテストの結果は優秀賞。最優秀賞には届きませんでした。良い経験となりました。

私達のチームは出場順番が1番目だったため、出場後、他のチームの演技を見学させていただきました。他のチームの演技を見学させていただく中で、改めて「介護に正解はない」ということを感じました。私達と全く同じ支援方法で演技を行ったチームは1つもありません。だからと言って、不適切な支援方法で演技をしているチームは1チームもいません。どのチームにもそれぞれの良さがあって、それぞれの工夫点がありました。ただ、出場していた全てのチームに共通していたことが1つだけあります。それは「利用者さんの」でき

ること」を絶対に潰さない」と言うことです。どのチームも「障がいを抱えているからできない」と決めつけて、支援者が何でも手を出すのでは無く、時間が掛かったとしても優しく声掛けをしながら見守っていました。私は福祉を学ぶまで「障がいを抱えている方はできることが限られる」と思っていたため、必要以上に手出しをし、無意識のうちにできることを潰してしまっていました。障がいを抱えておられる方は、人よりできないことが多いかもしれませんが、しかし、できることもたくさんあると思います。ただ、これは障害を抱えていない私達にも共通することなのではないでしょうか。完璧な人間なんていないのですから。障害を抱えておられる方も、そうでない私達も、全員が対等に関わり合い、温かい社会になっていけばと心から願います。

# 障害者週間のポスター

## ○最優秀賞

【小学生の部】



「みんなでいっしょにえがおのまち」

富山大学教育学部附属小学校 二年

米田佳純

【中学生の部】



「共存」

射水市立小杉南中学校 二年

長谷川奈南

# ○優秀賞

【中学生の部】



「ヘルプマークを知っていますか？」

黒部市立明峰中学校 一年

ひろ せ あい じ  
廣 世 藍 蒔



「ゴールまで……。」

射水市立小杉中学校 三年

や しま あす か  
八 嶋 明日香

# 令和五年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

## 1. 趣旨

障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するもの。

## 2. 主催

内閣府、富山県

## 3. 主管

富山県身体障害者団体協議会

## 4. 後援

富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

## 5. 募集テーマ

### (1) 心の輪を広げる体験作文

出会い、ふれあい、心の輪 ― 障害のある人となない人との心のふれあい体験を広げよう ―

### (2) 障害者週間のポスター

障害の有無にかかわらず誰もが能力を發揮して安全に安心して生活できる社会の実現

## 6. 応募資格

### (1) 心の輪を広げる体験作文

小学生、中学生、高校生及び一般（義務教育学校、特別支援学校の小学部、中学部及び高等部の児童生徒を含む。）

### (2) 障害者週間のポスター

小学生及び中学生（義務教育学校、特別支援学校の小学部及び中学部の児童生徒を含む。）



## 7. 募集の方法

### (1) 心の輪を広げる体験作文

#### ① 作文の題名(タイトル)及び内容

作文の題名(タイトル)は自由とし、内容は、障害のある人となない人との心のふれあいの体験をつづったものとする。  
なお、応募は、未発表のもの一編に限る。

#### ② 募集の区分

小学生区分、中学生区分、高校生区分及び一般区分の四区分とする。

#### ③ 制限字数、用紙の様式、作成方法等

ア. 一編当たりの制限字数は、小学生区分及び中学生区分については、四〇〇字詰め原稿用紙二〜四枚程度とし、高校生区分及び一般区分については、四〇〇字詰め原稿用紙四〜六枚程度とする。

イ. 用紙は、原則として四〇〇字詰め原稿用紙(B四判又はA四判。縦書き)を使用する。

ウ. パソコン等の電子機器による作成も可とする。この場合、用紙はイ.に準じるものとする。

エ. 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

#### ④ 応募者の属性等に関する資料(属性表)

作者の属性表(指定様式)の項目に従い、氏名、住所、年齢(生年月日)、所属先(学校名・学年又は職業)、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名(タイトル)及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

#### ⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五十二 TEL〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和五年七月三日（月）から九月一日（金）までとする（当日消印有効）。

(2) 障害者週間のポスター

① 作品の題名（タイトル）及び内容

作品の題名（タイトル）は自由とし、内容は、障害者に対する理解の促進等に資するものとし、障害のある人となない人の間の相互理解・交流等を造形的表現で訴えるものとする。

なお、応募は、未発表のもの一点に限るものとし、作品中に標語それに類する文字は入れないものとする。

② 募集の区分

小学生区分及び中学生区分の二区分とする。

③ 規格、画材、作成方法等

ア・規格は、画用紙のB三判（横三六四mm×縦五一五mm）又はいわゆる四つ切り（横三八二mm×縦五四二mm）を使用し、これに満たない作品は、B三判の台紙に貼付する。なお、作品は縦位置（縦長）のみとする。

イ・彩色画材は、自由とする。

ウ・第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、所属先（学校名・学年）、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会



〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二一 TEL〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和五年七月三日（月）から九月一日（金）までとする（当日消印有効）。

8. 選定

応募された作品については、審査のうえ、各区分ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を九月二十日（水）までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。ただし、内閣府では、より多くの方に受賞の機会を設けるため、過去を通して入賞は一度限りであることから、過去の入賞者は内閣府へ推薦しないものとする。

9. 表彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（二万円相当、五千円相当）を贈る。また、応募者全員に参加賞を贈る。

10. 個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。

ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11. その他

作品は原則として返却しない。ただし作品の返却を希望するときは、応募時に申し出ること。

令和5年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

1 「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計
小学生	0 編
中学生	27 編
高校生	89 編
一般	1 編
合計	117 編

2 「障害者週間のポスター」応募状況

	計
小学生	1 点
中学生	27 点
合計	28 点

## 令和五年度

### 「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷 尚生 元水橋郷土史料館長

島崎 俊哉 富山県有美術品管理事務員

関口 正 富山県社会福祉協議会事務局次長・総務企画課長

布尾 英二 富山県身体障害者団体協議会会長

平野 幹夫 富山県手をつなぐ育成会常務理事

中村 喜久男 富山県精神保健福祉家族連合会理事長

岩井 克行 富山県厚生部健康対策室健康課精神保健福祉主査

城石 祥子 富山県教育委員会県立学校課特別支援教育班指導主事

河尻 茂明 富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・  
障害者週間のポスター入賞作品集

― 出会い、ふれあい、心の輪 ―

令和五年十一月発行

発行 富山県厚生部障害福祉課

印刷 富山生きる場センター